リマ日本人学校の「ムラ」システムについて

前リマ日本人学校　教諭
神奈川県川崎市立宮崎小学校　教諭　橘　　徹

キーワード：ムラ、自然な縦割り活動、見通し、自浄作用、先輩文化

１．はじめに

職員室のコピー機の前に立つ。どこか懐かしい陽光。

私の生まれ育った市は、今は大きな市に合併されて今はもう名前を失ってしまった。小学校は、全校児童数200名ほど。私の学年は32名の１クラスであった。そこへ通う全児童の顔、名前、兄弟姉妹、親戚関係、家の人の職業、家の場所などをみんなが共通認識できていた。いわゆる「ムラ」である。そこでの人間関係は、年功序列で、年上の者がそのコミュニティに対して、ある種の責任感を無意識に持って関わる。それは、日本人学校で行われているような「自然な縦割り活動」と同様であると考えている。私は、国内で勤務していた頃、児童指導や児童会活動を担当することがあり、この「自然な」縦割り活動を作るのに苦慮した覚えがある。日本国内の学校では、規模が大きい学校であればなおさら、この縦割り活動が作りにくい状況になっているのではないだろうか。日本人学校で、それが「自然に」行われていることには驚かされた。

私はこの「ムラ」感覚が日本人学校を取り巻く環境の中にもあるのでは無いかと考えている。リマ日本人学校で仕事をし、学校のもっている力が子どもたちをより良く成長させていく姿を見て、その原因は何かということを考えながら過ごすようになった。やがて、子どもたち、それを取り巻く大人たちが有機的に関わっている様子がたくさんあることに気付いた。懇談会で、ある保護者から「学校は第二の家族だと思って子どもを通わせている」という言葉を聞くことができた。そこに集う人たちの学校に対するとらえ方が、日本国内の学校と違うことがようやく理解できた。そういえば、私の生まれ育った「ムラ」でも同じような感覚でそこに住む人々は関わっていたのではないだろうか。日本人学校における「懐かしさ」とは、そのようなところからきているのかもしれない。単純に原点回帰の話かというとそうではないと思っている。一度進んでいるものは前には戻れない。しかし、日本人学校の事例をもとに日本人が本来的に持っている「ムラ」感覚について再考し、その影響を考えながら日本の教育、学校というものを捉えたら、もしかしたら教育における山積する問題に一石を投じることができるのではないだろうか。この論文を通して探っていきたいと思う。

２．日本人のムラ

元国土交通省技監で国土学の研究者である大石久和は、著書の中で「日本人は縄文時代から江戸時代に至るまでの長い間、ほぼその程度の人数で共同体を構成してきた民なのである」と、結論づけている。我々の共同体の始まりが稲作の始まりである弥生時代とする考え方と異なり、もっと古いものだとしているところが興味深い。大石は、また国土学の観点から、「狭く小さく分散している平野の極めて小さな集落の中で、歴史のほとんどの期間を暮らしてきたことが、われわれを規定しているのである。（中略）その結果、集落の中でのもめ事を最も忌避し、全戸参加による話し合いによって物事を定めたり、争いごとを解決してきたりしたのである。これが、われわれ日本人の秩序感覚を磨いてきたのである」としている。特定の宗教を持つ人が少ない日本人がどうやって道徳観を身につけてきたのかを考える足がかりになる考え方である。また「和を以て貴しとなす」ということを大切にしてきた日本人の価値観が生まれてきた理由としてもうなずける話である。日本人が作ってきた共同体「ムラ」が現代の日本人の生活様式や価値観をも規定している。この感覚は、現代の私たちにも脈々と受け継がれているのではないだろうか。特に海外で生活した経験をもっていると、外国人の価値観を目の当たりにし、日本を客観的に捉えることがある。私の場合もそうであるが、その日本固有の共同体感覚の大切さに気付き、その

感覚が強くなるのかもしれない。実際に、現地在住の保護者のニーズとしては、学力やスキルというより、日本語教育はもちろん、「みんなで協力する」とか、「整理整頓」など日本的な道徳観を身に着けさせたいというものが多かった。

外務省のデータベースによると、ペルーの在留邦人数は3,408人（2016年10月）、日系人は推定10万人いるとされている。2016年のペルーの人口が3,148万人なので、約10,000分の1、日本人の数は極小数である。因みに日本人学校の2017年度の児童生徒数は36から42名の推移なので平均で39名。家庭数が平均で25なので単純に保護者を含めた数が89名。教職員や運営委員会、大使館の方々の中で日本人学校に直接関わる方々の人数を入れると約100名近くが、日本人学校の直近の日本人ということになる。ペルーの人口、在留邦人数から見ても、日本人学校は、かなり少数派のコミュニティになっている。この環境の中で、そのコミュニティを健全に維持するために、日本人の本来的に持っている「ムラ」感覚が発動するのは、至極自然なことではないだろうか。

３．人間関係の見通しのよさ

リマ日（リマ日本人学校の俗称）の場合でも、私が生まれ育った「ムラ」と同様、全校児童生徒はそれぞれの顔、名前、兄弟姉妹、家の人の職業、家の場所などを知っている。そして、自然な縦割り活動も生まれているのである。一つの例として放送図書委員会の企画におもしろいものがある。それは「人当てクイズ」である。いつからこの企画があるのか分からないが、少なくとも私が赴任したときにはもう存在していたし、長く務めている現地の先生もいつできたかわからないくらい前からあるそうである。昼の全校放送で子どもたちも大好きな企画の一つである。全児童生徒が対象で、服装やその子の家族構成や特技や特徴などかなり突っ込んだ個人情報までがいくつかあげられ、そのヒントをもとにその子を当てるというクイズである。日本の学校なら、「悪口やいじめにつながるからやめよう」と、なるような企画であるが、子どもたちは、自治の中でその企画を有効に使いこなしている。それは、子どもたちの関係性が密であるが故に成立するリマ日ならではの企画であると思う。子どもたちの関係性が密になれば、自然と各自に責任が生まれてくる。そうすると、そのコミュニティをしっかりと自治していきたいという気持ちが自然に生まれてくるのである。

それは、子どもを見守る保護者や教員をはじめとした日本人学校を支える大人たちにしても同じことが言える。学校教育法に規定されている在外教育施設の一つである「日本人学校」は、一般に現地日本人会が主体となって設立している。リマ日本人学校もその例外では無く、学校の運営に関しては現地の日本人会が担っている。月に1回は運営委員会ということで現地の日本企業の代表が学校に集まり、経営方針や行事などを確認していく。また、各種手続きや安全管理に関しては大使館との関わりも多く、年に7回実施される避難訓練にも、毎回大使館の防災担当者には同席していただき助言をいただいている。つまり、リマ日本人学校はペルーに居住する「日本人ムラの学校」という立ち位置になっている。日本の学校でも教育委員会やPTAなど学校を取り巻く大人たちは存在するものの、それぞれが独立して存在していてつながりが不明確という点で、日本人学校とは全く異質である。日本人学校の場合、保護者は非常に協力的である。スクールバス運行についても保護者が設立するバス委員会が中心になっている。できるだけ教員の負担にならないように配慮していただいている。これも、児童生徒同様、保護者の中にもコミュニティに対する責任が明確であるため、自浄作用が生まれていると言えるであろう。私は、この人間関係の見通しの良さが、人間関係の自浄作用を生んでいるのではないかと考えている。

４．生活の見通しのよさ

日本人学校の見通しの良さは、人間関係の見通しの良さだけではない。生活についての見通しも良い。リマ日本人学校の過去10数年分の年間行事計画や時間割を振り返ってみると、マイナーチェンジはあるものの、大きくは変わっていない。これは行事一つとって見てみても、日本人会の各機関や日系人協会とのつながりがあるため、変更が難しいことが理由の一つとして挙げられる。例えば入学式、文化祭、卒業式などは来賓を招待するが、来賓の方もこの時期は日本人学校の行事があるからということでスケジュールを確保してくれている場合がほとん

どである。学校の運営委員会は、現地で働く日本企業の方々で編成されており、月に１回程度学校に集まり話し合いをする。これも通常業務のかたわら、時間を割いて学校の運営にご尽力頂いている。学校と企業が強いつながりを持っているため、学校だけが急激に計画を変更することが困難なのである。慣例というのは、あまり良い意味で使われることは無いが、合理的な側面も持っているのである。子どもたちにしてみると、長くリマ日にいればいるほどその行事でどんなことをやるのか、どの学年がどんなことをするのかがよく分かっている。そういう子どもたちが、他の子どもたちをしっかりとリードしていきやすくなっている。その方がリーダーはリーダーシップを発揮しやすいのである。また、リマ日の子どもはよく他の学年の掲示板を見ている。他の学年の掲示板を見て、「あ、これ去年やったな」とか「○年生になったらこんなことやるんだ」といった見通しを持っているのである。同じ学年の友だちと比べるだけで無く、他の学年とも自分を比べることができるので、自分のポジションを認識しやすいのである。

教科外の活動でも子どもたちが見通しをもって関わる場面がたくさんある。その一つに「色紙」がある。リマ日を離れる者には、全校の児童生徒、教職員から寄せ書きを集めた色紙をプレゼントする伝統がある。１枚の色紙が全校を回り、他の友だちがどんなことを書いているのかを見ながら自分の気もちを１枚の色紙に間違いの無いように記していくのである。一つの作品をみんなで作っているという感覚が自然に生まれ、ここにもやはり責任が生じるのである。

５．先輩文化という伝統

このようなことからリマ日の場合はリーダーが育ちやすい。自然な縦割り活動の中では必然的に、高学年がリーダーシップを発揮することになるからである。また、上級生は下級生の面倒を見ることによって、自分の存在意義を確認し、安心して生活することができるのである。ここに自然発生的な「先輩文化」が生まれてくるのである。その文化が児童生徒の安心感を育み、新しく転入してくる子どもたちも安心してその流れに乗ることができるのである。転入転出どちらの児童生徒にも全校集会が行われるが、転出していく児童生徒は保護者も含め、名残を惜しんで出て行く。国外に転出した児童で、自分の国が休みになるので、どうしてもリマ日に戻ってきたくて体験入学でリマ日に戻ってくるという事例もあった。

また、特別支援としての機能も生まれている。ある生徒は、日本で不適応を起こし、不登校になっていた状態でリマ日に編入した。しかし、この雰囲気の中で自分のポジションを見つけ、小さい子どもたちとも仲良くふれ合った。「遊んで遊んで」という小さい子ならではの積極的な働きかけもあった。そのような関わりの中で自信を取り戻し、立派に卒業をすることができた。学年の大きい児童生徒には、他にも同様の事例が見られた。それは教師の働きかけというより、子どもたちとの関わりの中での再生であった。自然な縦割り活動の中で生まれてくる先輩文化は、年少者にも年長者にもメリットがあると言えるだろう。

このような先輩文化は、リマ日の教育の最大の利点だとも考えている。休み時間には、学年を超えて子どもたちが関わり、遊びの中から人生に必要な様々なことを学んでいる。学校の機能などというものは、本来それで十分なのだと思う。教員は教員であって、それ以上でもそれ以下でもない。ただ社会的な大人として存在していることで、子どもは子どもとして存在できるのではないだろうか。この「自然な縦割り活動」は、私の小学生時代にも当然としてそこにあったものだ。自然な縦割り活動は、自然な先輩文化を生み、それが伝統になった。伝統は見通しのよさを生み、その安心感は集団の自浄作用を高めることになった。そしてその縦割り活動がなぜ生まれるかを考えたときに、私は、この日本人学校を取り巻く「ムラ」感覚が土台になっていると考えるようになった。

６．これからの日本の教育

日本人学校には、実際に昭和50年代の教具も散見しているし、電子黒板や50インチクラスの大型のテレビ、タブレットなどのIT（Information Technology：情報技術）機器が配備されているかというとそうではない。しかし、

そのようなものが本当に必要なものなのだろうか。インフラを整備しただけで、教育本来の役割を全うしているというのはあまりにも浅はかではないか。むしろ日本の教育が失ってしまった教育にとって最も大切なもの、今現在、日本の学校が躍起になって、継ぎ足し、継ぎ足しで取り戻そうとしているものが日本人学校にはある。保護者と連携したコミュニティスクールの考え方、小中一貫教育、少人数指導、低年齢からの外国語教育、テロを想定した安全に対する教育、教科担任制、専門家を招いてのキャリア教育。今、文科省をはじめ、国全体で新しい教育の必要性が叫ばれている。日本人学校には、それが当然と存在している。その存在理由になっているのが日本人的な「ムラ」の感覚なのである。日本人学校は、古い日本人的な価値観をもちながら最新の教育をするという非常に特異な施設だと私は思っている。まずは、日本人が世界基準では特異な存在であることを知り、「ムラ」感覚が現代の日本人でも存在していることを知るべきであると考える。2020年には東京オリンピック、パラリンピックが開催され、新指導要領が完全施行になる。しかし、国際理解という意味で日本は後進国であると言わざるを得ない。この理解なくして、日本のこれからの教育は語れないのではないだろうか。

国内では、教員不足に加え、メディアでは教師の不祥事が日々報道されている。多様化の末期的症状であると思う。ここへ来て、前述のような新しい教育、学校の在り方を推進している。すでに失われている「ムラ」感覚なくして、学校が本当の意味で教育的な力を発揮することは不可能であろう。そこには、人と人とのつながりを「ムラ」で作ってきた日本人の感覚、実はその感覚は世界の中で特異な感覚であり、日本人の教育にとっては一番適しているという視点が抜けているからである。ある部分で成功した諸外国の真似をするだけで、その外国のシステムをそのまま導入するだけでは効果は出ない。流行として終わっていくだけである。結局のところ教員にそのしわ寄せがきて、多忙化し、本来の業務からはほど遠いところに着地をすることになる。目の前には、毎年、子どもたちがいる。立ち止まっている暇はない。だからと言って諸外国の真似をするだけの教育観では二番煎じになり、これまでと同じような堂々巡りをするだけで、新学習指導要領でうたうような「生きる力」に、たどり着くことはないであろう。日本人が、国際理解を深め、自分たちの立ち位置をしっかり捉えなおさなければ、新しい教育観も絵にかいた餅で終わる。

〈参考〉

「国土が日本人の謎を解く」大石久和　　産経新聞出版　2015

外務省HP　mofa.go.jp　　福井新聞ONLINE 2018.2.2　　http://www.fuishimbun.co.jp